

「HTPT collection 5」

「不公平な喧嘩」・・・2 P

「肩を痛めたピッチャー」・・・9 P

「スパイの暗号」・・・14 P

「悲しい回想」・・・22 P

「カーテンコール」・・・31 P

「ザ・ドクターファイト」・・・37 P

「7人の黒服」・・・46 P

「最終回」・・・56 P

「不公平な喧嘩」

【登場人物】

生徒 1

生徒 2

生徒 3

他校生徒 1

他校生徒 2

先生

舞台はどこか広場（公園等）。下手側に生徒1〜3が座っている。生徒1はグローブを、生徒3はバットを持っている。

明転。

生徒1 「次の試合は決勝戦…これに勝てば甲子園か」

生徒2 「ここまで本当に長かったな…落ちこぼれだった俺達が…夢のようだ」

生徒3 「ああ。だけどここまで来られたのも、全部幸子先生のおかげだ」

生徒1 「へっ…あいつには本当に感謝してるぜ。女だつてのに誰よりも熱い…俺達のために、監督までやってくれたんだ」

生徒2 「あとは万全な状態で試合に臨むだけ。だから絶対に、問題とか起こすなよ」

他生徒1・2 「ははははー」

他校生徒1・2が上手から入ってくる。

生徒3 「（上手側を向きながら）うん？あいつら…確か決勝戦の高校の奴ら…？」

他2 「へーじゃあ次の対戦校の監督って、女なんすね。珍しい」

他1 「なあ？女なんかがまともに監督できんのかよな？ははは！」

生徒2 「ちっ…！先生のこと何も知らねえくせに…！」

他1 「それなのに決勝まで来やがった。なーんか怪しいよなー？どうせその女監督さんが裏でヤラシイことでもしてんだよ。あー俺もされてー。そしたら試合でちよつとは手抜いてやるのによお！ぎゃはははは！」

生徒1、グローブを地面に叩きつけ立ち上がる。

生徒2 「え？」

生徒1、他生徒1の方へと進んでいく。

生徒3 「おい…お前まさか…！？」

生徒2・3も立ち上がる。（生徒1へ顔を向けている）

他1 「あん？なんだお前？」

生徒1、他生徒1を殴る。焦る生徒2・3。

生徒1 「先生の悪口を言う奴は絶対許さねえ…！」

生徒2 「あの馬鹿やりやがった…！」

他1 「…上等だこの野郎…！」

生徒1と他1、殴り合いの喧嘩をしようとする。

生徒2・3・他2 「わー！やめろやめろ！」

生徒2・3は生徒1を、他生徒2は他生徒1を止める。

生徒1 「謝れ…！今言ったことを謝れよ！」

他1 「ああ！？知らねえよクソ野郎が！」

生徒1、制しを振り切り他生徒1を再び殴る。

他1 「てめえ…！なめんな！」

他生徒1、生徒1を殴ろうとするが他生徒2に止められて中々殴りにいけない。生徒1は生徒2・3に制されている。

生徒2 「2人とも！喧嘩をやめてくれ！」

生徒1 「許せねえ…！絶対に許せねえ！」

生徒1、制しを振り切り他生徒1を再び殴る。

他1 「それは俺の台詞だ！」

他生徒1、生徒1を殴ろうとするが他生徒2に止められて中々殴りにいけない。

他2 「先輩！何殴り合いしてんすか！マズイっすよ！」

生徒1、制しを振り切り再び他生徒1に近づく。

生徒1 「この野郎…！（殴る）この野郎…！（もう一発殴る）」

他1 「ちょ…おい…！」

生徒3 「2人ともやめろ！殴り合いをやめてくれ！」

他生徒1、生徒1を殴ろうとするが他生徒2に止められて全然殴りにいけない。生徒1、制しを振り切り再び他生徒1に近づく。

生徒1「この野郎！（殴る）この野、（もう一発殴ろうとする）」
他1「おとお俺ばっかり殴られてない！？さっきから！」

間

生徒1、他生徒1を殴る。

他1「やめろ！一旦やめろつつうの！止まれお前ら！…あのさあ、さっきから俺しか殴られてないよね！？」

生徒1「…いやいやいや」（生徒2と3、他生徒2も『いやいやいや』のリアクション）

他1「いやいやいや！…なんか対等の喧嘩感出してたけど、俺が一方的に殴られてただけだったからね！」

生徒1「…いやいやいや」（生徒2と3、他生徒2も『いやいやいや』のリアクション）

他1「それやめろ！いやいやじゃねえよ！なんか不公平じゃない！？俺にだって殴らせろよ！」（拳を上げる）

生徒1「…上等だこの野郎ー！」（殴りにいこうとする）

生徒2・3・他2「やめろやめろ！」

生徒1、制しを振り切り他生徒1を殴る。他生徒1も殴り返そうとするが他生徒2にガツチリ止められ全然殴りにいけない。生徒1、再び制しを振り切り他生徒1を殴る。更にもう1発殴ろうとする。

他1「んだからやめやめ！やめてえ！」

4人「え？」

他1「ほらやっぱり！俺だけ殴られてんじゃない！」

他2「…気のせいでは？」

他1「ないねえ！」

他2「だとしたらなんで殴りにいかないんすか！」

他1「お前のガードが固いからだよ！ぜんっぜん振りほどけねえんだよ！」

他生徒2、軽く首をかしげる。

他1「かしげるな首を！つうかお前ら2人もさ、本気でこいつを止める気あんの？」

生徒2 「あるに決まってるじゃないか！」

生徒3 「俺達には大事な試合が控えているんだ！」

他1 「だったらちゃんと止めるよ！そっち2人なんだからさ、ちゃんとしっかり止めてろよ！俺ももう少し頑張ってこいつ（他2）振りほどいてみせるからさ、お前らも頼むよー！」

間

生徒1 「この野郎ー！」（殴りにいこうとする）

生徒2・3 「やめろやめろー！」

生徒2・3、生徒1を止める。他1は他2にガッツリ固められながら生徒1を見ている。

他1 「いいよー止められてるよーその調子だよー」

生徒1、ゆっくりと生徒2・3の制しから抜けだす。

他1 「あ、あ、出てる、出てる、出てるよー！」

生徒2・3、再び生徒1を制す。

他1 「おー冷や冷やしたよーいいよやればできるじゃん。よっしゃ俺も…（他生徒2から抜けようともがくが全然殴りにいけない）…はい固い！え？どういう原理？こういうの限定で力強くなるの？それとも才能？もうこれで将来食っていけば？」

生徒1、ゆっくりと生徒2・3の制しから抜けだす。

他1 「あ、あ、また来てる、来てるよ、来てるよー！（他2に）おいお前も！一旦あっち行って加勢して来い！止めてこいー！」

他生徒2、生徒2・3に混ざり、生徒1を止める。生徒2・3は何もしなくなる。

他1 「安定するなーあいつ入ると。（生徒1に近づきながら）流石にこれでもう、」

生徒1 「（他2の脇腹をくすぐりながら）こちよこちよこちよ」

他2 「（生徒1から手を離す）ぎやはははは」

生徒1、目の前にいる他生徒1を殴る。

他1「(殴られながら) 意外な弱点！くそーあいつあんな弱点あったのかー！ていうか今フリーだったから殴りにいけたじゃん！いや、今ならまだ…！」

他生徒1、殴りにいこうとする。他生徒2、2人の間に入り手を広げて止める。

他2「先輩もうやめましようよ！…もう十分でしょ！？」

他1「いや何も十分じゃねえよ！」

他2「先輩が殴ってまた相手も殴り返して…！このままじゃ永遠に終わらないっす！」

他1「今そんなシステムになってねえよ！向こうサイドの永久機関だよ！」

他生徒2・生徒1、軽く首をかしげる。

他1「かしげるな首を！…そこどかねえんだったらな、まずはお前からやってやるよ！」

生徒2・3「やめろやめろ！」

生徒2、他生徒1を止める。生徒3、他生徒2を止めようとするがすぐ抜けられる。

他1「もっと粘れ！」

他生徒1、他生徒2に殴られる。更に生徒1も他生徒1を殴り倒す。倒れた他生徒1を生徒2・3、蹴りにいく。

他1「もう良い加減にしろ！ふざけんな！」

4人、揃ってカッコよく他生徒1の方を向いている。

他1「なんだその顔。なんで揃ってんだよ。打ち合わせ済みなの？」

先生「皆！何やってるの！」

先生が出てくる。

生徒1〜3「先生！」

他1「こいつがその…女監督か」

先生「急に連絡が入って…！先生もう心配で慌てて来たのよ！一体どうしたの！？」

生徒2「先生聞いてください！こいつが他校の奴と殴り合いの喧嘩を！」

他1「殴り合ってはねえよ。正確に伝えろ」

先生「いつも言ってるでしょ！暴力だけは絶対駄目だって！」

生徒3「けど先生！これには理由があるんです！」

先生「言い訳は聞きたくないわ」

生徒3「けど先生！向こうの奴らが先生のわる、」

先生「聞きたくないわ」

生徒3「けど先生！あいつが、」

先生「しゃー！！！」

他1「聞いてあげれば？俺が言うのもなんだけどさあ」

生徒1「いいよ…俺が我慢できなかったのが悪いんだ。先生の悪口を言われたくらいで」

先生「え？私の悪口を、言われたの？」

生徒1「はい。女なんかには監督ができる訳ねえだろぎやはは！って、あいつが」

先生、他生徒1を見る。

他1「え？」

先生「この野郎！」（他生徒1を殴ろうとする）

生徒1〜3・他2「やめろやめろ！」（先生と他生徒1を止めようとする）

他1「誰か助けてー！」

暗転。

「肩を痛めたピッチャー」

【登場人物】

キャプテン

投手

捕手

医者

マネージャー

舞台は診療所。投手、キャプテン、捕手、医者がいる。投手と医者は向かい合って座っている。
明転。

キャ「先生…！どうなんですか、竹内（投手）の肩は？」

捕手「明日の試合に勝てば…！俺達の夢、甲子園なんです！こいつの肩、大丈夫ですよね？」

医者「…残念ですが」

キャ・捕手「え？」

医者「良い状態とは、言えません。明日の試合、彼が投げれば50%の確率で肩を壊してしまってください」

キャ・捕手「そんな…」

捕手「なんでだよ…！なんでそんな…！くそ…！」

キャ「山下…落ち着け」

捕手「だってキャプテン…！こんなのってあんまりです…！やっとなんかここまで来たのに…！明日勝てば甲子園なのに…！親友のこいつが…！」

投手「ふっ…50%の確率…か」（天を仰ぐ）

捕手「竹内？お前まさか…！？」

キャ「山下、決めるのは竹内だ。俺は竹内の意思ってやつを大切にしたい、してやりたい。

次勝てば甲子園…皆の夢が叶う。竹内が明日夢のために投げたいと言うのなら…！俺にはそれを止める権利はない…！俺は竹内の夢を！決断を！尊重する、してやる！その選択はキャプテンとして、失格かもしれないが…」

捕手「キャプテン…」

キャ「竹内、お前は明日の試合、」

投手「初めから決まっていますよキャプテン。俺は明日の試合…投げないっす」

キャ「…え？」（ゆっくりと振り向きながら）

投手「俺は明日の試合…投げないっす」

キャ「（一回後ろを向いて素早く向き直る）…え？」

投手「医者に言われた瞬間に50%でも肩壊すの嫌だなくって思ったんで、投げないっす」

キャ「なるほど…あの一応確認んだけど、客観的にね、いや客観的に見た場合、竹内が投げないと明日の強豪校とは勝負にならずに負けると思うけど…？」

投手・キャ「投げないっす」（顔合わせる）

キャ「かあ…なるほど…」

医者「はいじゃあしばらくは絶対安静ということだ、」（後ろに向きながら）

キャ「ちよいちよいちよいちよいまだちよっと終わりにしないでください」

医者「え？」

キャ「竹内…ちよっと聞いてくれ。いや俺は良いんだけど、俺は別に全然良いんだけど…ほ

捕手「そんな大事なこと……!!」

投手「なんで早く教えてくれなかったんですかキャプテン！」

キャ「お前ら：分かってくれたか」

投手・捕手「はい」

キャ「それじゃあ明日！」

捕手「谷さんの家へ！」

投手「励ましに行こう！」

キャ「違う！」

投手・捕手「え？」

キャ「そういうことじゃない！そんな直接的な方法じゃなくて、俺達が甲子園に行つて、谷

さんを勇気つけようつてことだよ！それに勿論谷さんのためだけじゃない！マネー

ジャーや山下以外のチームの皆のためにもだな、」

投手「さつきから：皆皆つて、キャプラン自身はどうなんすか？」

キャ「え？」

投手「自分の気持ちを我慢するのはよくないんすよね？俺はまだキャプテンの本音つてや

つを、心を……ここに（自分の胸を指す）ぶつけてもらつてない気が、するんすよ」

キャ「竹内：そうか：俺は、なんて卑怯者だったんだ……竹内……俺は、俺は甲子園に行き

たい！！甲子園に行きてえんだよおお！！だから明日の試合！投げてくれええ！！」

投手「投げないつす」

キャ「なんだお前！ふざけんな！俺の純情弄びやがつて！もう頼むよお！明日投げてくれ

よお！マネージャーの甲子園に連れてつてつてやつもさあ！これ絶対俺だけに言っ

てるやつだからさあ！甲子園行けばマネージャーとも付き合えそうなんだよお！」

捕手「どんだん本音が出てくる」

医者「気持ちが良いね」

マネージャーが入ってくる。

マネ「竹内君の容態はどうですか？」

キャ「マネージャー！？」

マネ「マネージャーです」

キャ「あの、今の俺の話：聞こえてた？」

マネ「話？いえ聞いてないですけど」

キャ「だったら良いんだ。というかほら、マネージャーからも言つてやつてくれないか？」

マネ「え？」

キャ「キミも甲子園、行きたいよな？」

マネ「それは勿論行きたいですけど」

キャ「ほらあ！な！？な！」

マネ「まあ私もそうなんですけど、皆が甲子園行ったら私のカレも喜ぶので」

キャ「そうだカレも喜ぶんだぞ！…彼氏いんの？」

マネ「いますけど」

キャ「え、ちよ、え…？彼氏…いるんだってさ」

捕手「ははは」

投手「滑稽」

キャ「オブラート！」

医者「はい」（オブラートを渡す）

キャ「医者だから持つてる！…じゃない！彼氏いんのかよ！誰だよ！」

マネ「谷さん」

キャ「あいつかい！」

マネ「谷さんも、皆が甲子園行ったら喜ぶよ」

キャ「引退した奴の話なんてすんな！もういない奴なんて関係ないから！黙ってる！」

捕手「えー…」

キャ「ていうかあの人、陰でめっちゃ人の悪口言う人だから別れた方が良いよ」

捕手「手の平返しが過ぎる」

医者「どいうかキミも今陰口言ってるけどね」

キャ「ホント知られてないだけで裏ではめっちゃ性格悪いから、うん」

マネ「えー…そうだったんだ…じゃあ別れようかな」

キャ「え？マジで？」

マネ「まあ正直、野球してない彼に魅力なくなったっていうかも単純に飽きてきたっていうかも良いかなって」

キャ「よっしゃあ！」

捕手「マネージャーの方が性格悪くない？」

医者「（カルテに書きながら）恋は人を盲目にするっ」と

投手「どいうか谷さんの悩みてこの人のことでは」

マネ「実は…少し前から気になってる人もいるし…」

キャ「え？まさかそれって…！」

マネ「竹内君、甲子園に行けたら私とお付き合いしてくれませんか？」

キャ「お前明日投げるな！」

投手「はい」

暗転。

「スパイの暗号」

【登場人物】

先輩スパイ

新人スパイ

マスター

ウェイター

客1

客2

客3

女

先輩、→のような意味不明な言語を発しながら、自由に動く（踊る）。新人、動揺しながら先輩とバーの人達の方を交互に見ている。バーにいる人達は動きを止めている。

先輩「パ・ル・モ〜ン！」（ピタッと止まる）

間

ウエ「少し領きながら）…マスター、やべえ客来ました！」（マスターへ近づく）

新人「やっぱり！これやっぱりただのやべえやつだった！ちよつと先輩！どうするんですか！？」

先輩「黙っている。マスターが来る」

新人「え？」

マスター、慌てるウェイターを冷静に手で制している。そしてマスター、ゆっくりと先輩の元へと近づき、目の前で止まる。

マスター「…お帰り願えますか？」

新人「やっぱりかい！」

マス「お帰り願えますか？」

先輩「（右手を挙げながら）…メロンソーダ」

マス「お帰り願えますか？」

先輩「（右手を挙げながら）カニカマ」

マス「お帰り願えますか？」

先輩「（右手を挙げながら）恐竜の化石」

新人「あ、ずつと自分の好きなもの言ってる！」

マス「お帰り願えますか？」

先輩「（右手を挙げながら）あいみよん」

新人「いや一旦出直しましょう先輩！警察とか呼ばれる前に！」

先輩「（右手を挙げながら）カニクリームコロッケ」

マス「お帰り願えますか？」

新人「先輩！」

マス「さて、今ので何回『お帰り願えますか？』と言ったでしょうか？」

新人「え？」

先輩「あんたの娘の歳と同じ数」

マス「いいえ違います。なぜなら私の娘は」

先輩・マス「今日誕生日だから」

マス「ウェイター、例のものを持ってきてくれ」

ウェ「はっ！」（敬礼する）

ウェイター、奥へはける。

新人「あ、ここまでが暗号だったの！？長くない！？」

先輩「それ程重要な資料なのだ。暗号も長くなる」

新人「いやよかった。先輩なんかクスリとかやってんのかと思いましたよ」

客1、酒瓶を片手に近づいてくる。

客1「酔っ払いながら）おいおいにちゃらん！さっきの踊り面白かったな！もう一回やってくれよ！ぎやははは！！」

先輩「ちっ…」

客1「おいおい聞こえてる？無視すんなよう！」

新人「すみません、勘弁してください」

客1「はあく？お前らが先にふざけてたんじゃねえか！（先輩に）てめえ！あたしを無視すんじゃねえ！」

新人「いやあの、ホントにやめてください…！」

客1「無視すんなってんだろ！」

先輩「貴様…！今、何回『無視すんなよ』と言った？」

客1「サザエさんの息子の歳と同じ数」

先輩・客1「タラちゃん」（がっしりと握手をする）

新人「また暗号かい！もう良いよこのパターン！」

先輩「こいつ、俺達を挑発してきただろ？」

新人「確かに！挑発ってああいうことか！じゃあこの人が仲間なのか」

客1「よろしくな」

新人「ではこれで任務は完了ですか？」

先輩「いや…仲間が1人だけとは限らない。資料が渡されるまで、注意深いよう」

客1「それに、敵勢力へ寝返ったスパイが侵入している可能性もあるぞ。用心していこう」

マス「彼女が戻ってくるまで、一杯如何ですか？」

新人「せっかくですが、仕事中ですので」

先輩「俺は少し…お花を摘みにいってくる」

先輩、奥へはける。

客1「(新人に) 今のは…トイレに行くという暗号だ」

新人「知ってます知ってます。というかそれは別に暗号ではないですし」

女、店に入ってくる。『カランカラン』というSE。店を見回した後、新人の方へ近づいてくる。

女「あら…あなた、顔をよく見せて」

女、新人の顎を妖艶に触ってくる。

新人「これは…挑発か…!?ということはまさか…!」

女「あなたに聞きたいことがあるのだけど…良いかしら?」

新人「先輩がはけた方を見ながら」しかし…!まだ僕では…!」

女「あら?あなたでは駄目なの?」

新人「…いえ、僕で大丈夫です…! (右手を挙げ) 何でも、聞いてください…!」

客1「B級暗号か…」

女「(妖艶に) 下着は…何派?」

新人「(右手を挙げながら) ブリーフ…!」

女「(妖艶に股の辺りに触れ) 好きな、色は…?」

新人「(右手を挙げながら) 黒…!」

女「(妖艶に) サーターアンドギーとちんすこう、どちらが…?」

新人「(右手を挙げながら) ちんすこう…!」

女「…合格よ」

新人「え?」

女「1時間後、(メモを渡しながら) このホテルの部屋に来て」

女、奥へはける。先輩、いつの間にか戻って来ている。

先輩「見てたぞ」

新人「先輩…!」

先輩「やったな」

新人「ということ…!」

先輩「あいつはただの痴女だ」

新人「ただの痴女!?」

先輩「やったな」

新人「2回目」

先輩「楽しんでこい」

新人「いや行かないですよ。じゃああの人は仲間じゃないんですね」

ウェイター、アタッシユケースを持って出てくる。

ウエ「お待たせしました」

先輩「ご苦労」(アタッシユケースを受け取る)

新人「あ、先輩。それくらいは僕が持ちますよ」

先輩「……いや、断る」

新人「え？」

先輩「…敵のスパイに、渡す訳がないだろう」

ウエ「は？あんた急に何言って、」

新人「ちよつと先輩…あなた程のスパイに、しらを切っても無駄みたいだな」

ウエ「え？」

新人「いつから気付いていた？」

先輩「お前は俺の後輩の完璧な変装をしていた。しかし1つだけ、ミスを犯した」

女が出てくる。

女「は〜い」

新人「なるほど…この女もグルだったという訳か」

先輩「…いやこいつは本当に関係ない。なんで今出てきた？」

女「ば〜い」

女、妖艶に店から出ていく(そのままはける)。

マス「なんだったんだあいつ…」

ウエ「トイレ借りただけだったな…」

先輩「まああの女のおかげでは…あるのだがな」

新人「どういうことだ？」

先輩「あいつは最近変えたんだよ…下着をボクサーパンツにな。もうブリーフ派ではない」

新人「データベースの情報が古かったか。まあ…バレてしまったのは仕方ない。(顔に手をや

り剥ぐマイム) べりべりべりべり…!…ブンツ!(客2に投げるマイム)」

客2「…パシッ!(受け取るマイム) むしゃむしゃむしゃ(食べるマイム)」

先輩、→のような意味不明な言語を発しながら自由に動き、扉の前へ移動する。

新人「(扉を開けながら) パーコーメン (店から出てはけながら) おかわり捨てる」

間

新人「…しまったこれは暗号じゃなかった!」

新人、客1〜3、ダッシュでバーから出る。

新人「待てー!」

4人、そのまま下手へはける。

間

ウエ「くつくつく…スパイ同士で、馬鹿な奴らね」

マス「ええまったく…奴らに渡した資料は、偽物だと言うのに。はっは…」

マス・ウエ「はっはっはっは」

先輩・新人「はっはっはっは」

先輩と新人、小型イヤホンを耳に当てながら出てくる。客1〜3、女も出てくる(先輩・新人の後ろにいる)。

先輩「奴らめ…ようやく尻尾を出したな。やはりこれは偽物だったか」

新人「流石先輩。トイレへ行った時に盗聴器を仕掛けてたんですね」

先輩「お前達も俺の動きによくついてきてくれた」

新人「頑張りました!」

女「(前に出ながら) それで、次はどうするの?」

新人「やはりこの人も仲間なんで、」

先輩「こいつは本当に違う。テキトーに入ってくるな。帰れ」

徐々に暗転していく。

ナレ『スパイ達の夜はまだ…始まったばかりだ』

「悲しい回想」

【登場人物】

男 1

男 2

女 1

女 2

犬

猫

ぬいぐるみ（黒子）

マコト兄さん

ルンバ（黒子）

犬 2

保健所の人

場所は居酒屋の個室。舞台中央に椅子4つとテーブルが1つ。男1は舞台下手正面に立ち、男2、女1、女2は座っている。男1にスポット。

男1 「俺の名前は斉藤太郎。俺には生まれつきちよつとした超能力がある。何、別に大した力ではないが、俺は人の悲しみに共感できる力を持っている。この力によって俺は人の悲しみを感じとれ、その悲しみの内容すらもイメージして視ることができてしまうんだ」

舞台中央にも照明。

男2 「それじゃあ注文も終わったし…まずは簡単に自己紹介からいきましょー！」

女2 「いえーい！」

男1 「俺は今日、合コンにきている」

男2 「俺は神山賢二でっす！三角大学の3年生でーす！」

男1 「まったく俺にはすぐ嫉妬してしまう彼女がいるってのに、こいつに無理やり連れてこられてしまった」

女2 「菅原智子でーす。まるばつ大学の3年生でーす。いえーい」

男1 「まあ来たからには楽しもうと思う。ただ…こういう楽しい所にこそ、人の悲しみは隠れているんだ」

男1、男2の隣に座る。下手側の照明、消える。

男1 「斉藤太郎と言います。こいつと同じ大学の3年生です。今日はよろしくね」

女1 「えつと…横田香奈です…。智子と同じ大学の…3年生です…」

男2 「あれー？なんか香奈ちゃんテンション低くなーい？」

女2 「あーごめんこの娘、最近ちよつと元気なくてさー」

男2 「そうなん？だったら今日は俺が元気にさせちやいまーす！」

女2 「いえーい！」

男2 「じゃあさじゃあさ！まずは皆の好きなもの教えてよ」

女2 「私は動物が好きかなー」

男2 「良いねアニマル！俺も犬とかめっちゃ好きよ！」

女2 「犬はきらーい」

男2 「ごめーん」

女2 「でもー香奈は犬とか好きじゃなかった？」

女1 「え…？犬？そうだね…私は、犬が…犬が…ポチ…」

悲しいBGMが流れる。女1、俯いていく。

男1 「これは…」

上手側に照明。男2と女2は止まる。犬が現れる。

男1 「彼女の悲しい感情が入り込んでくる…回想になって、視える…！」

犬 「わんわん！わんわん！」

女1 「ポチは…私が去年から飼い始めた犬だった。1人暮らしの寂しさを癒してくれる、とても大切な存在だった」

犬 「くうくん」

女1 「でも！別れの日は突然やってきた！」

犬、手を振りながらはけていく。

女1 「よく晴れた午後の日、公園でポチを自由に遊ばせていると…いつの間にかポチは、いなくなっていた。ポチ…？ポチどこに行ったの！？ポチー！！」

男1 「そうか彼女は…大切な愛犬を…」

女1 「元気での…？」

舞台中央に照明（徐々に切り替わる）。動き始める男2と女2。

女1 「ポチ…」

男2 「へーじゃあ香奈ちゃん大好きなんだ？俺さあ、飼ってる犬のとおきの写真が、」

男1 「あのさ…！犬の話…やめない？」

女1 「え？」

男1 「ちよつと…俺も、苦手でさ」

男2 「なんだよー。お前も犬駄目だったっけ？」

男1 「ごめんごめん」（女1も見る）

女1 「ううん…ありがとう」

女2 「私はね〜猫だったら好きだよ〜」

男1 「良いね。だったら猫の話しようよ。俺もしたいな」

男2 「なんだよ皆して猫猫ってー俺はなあ…猫も好きでーす！」

男2・女2 「いえ〜い〜」

男1 「…横田さんは、猫好き？」

女1 「私猫はね、猫は、猫は…タマ…」

悲しいBGMが流れる。女1、俯いていく。

男1「え？」

上手側に照明。男2と女2は止まる。猫が現れる。

男1「また回想？」

猫「にゃー！にゃー！」

女1「タマは…近所にいる野良猫だった。私はタマに、よく同じ場所でエサをあげていた。人懐っこい子だった」

猫「みやおくん」

女1「でも！別れの日は突然やってきた！」

猫、手を振りながらはけていく。

女1「よく晴れた午後の日、いつもの場所にタマはいなかった。次の日も、その次の日もいなかった…！もうここには現れないの？タマ…？タマどこに行ったの！？タマー！…元気でいるの？タマ…」

舞台中央に照明（徐々に切り替わる）。動き始める男2と女2。

男2「へー智子ちゃんめっちゃ猫好きじゃん。俺さとおきの猫の写真が、」

男1「やめ、ようか猫の話も！」

男2「はあ！？いやさっきまでお前も猫の話したそうだったじゃん」

男1「ちよつと急にどうでもよくなったわ、うん。…動物の話、やめない？なんかまだ地雷眠ってるような気がする」

男2「え？」

男1「いやあのだから、なんか違う話しようよ」

男2「なんだよお前ー勝手だなー。じゃあ罰として、お前のちよつと恥ずかしい話してやる」

男1「なんだよ」

女2「何々々？気になる〜」

男2「いやこいつ可愛いものが好きでさ、男のくせに部屋にぬいぐるみ置いてんだよ」

女2「え〜良いじゃ〜ん。ギャップ萌え〜。ぬいぐるみ、良いよね？」

女1「うん良いと思うよ、ぬいぐるみ。ぬいぐるみ…？」

悲しいBGMが流れる。女1、俯いていく。男1、キョロキョロと天を見る。

男1「嘘だろ？」

上手側に照明。男2と女2は止まる。黒子がぬいぐるみを操って現れる。

女1「ジュリアン…」

ぬい(黒子)「香奈ちゃん！香奈ちゃん！」

女1「ジュリアンは、私の持っていた大切なぬいぐるみだった…でも！別れの日突然やってきた！よく晴れた午後の日…ジュリアンを洗濯して外に干していたら、風で飛ばされてしまった！」

黒子、手を振りながらはけていく。

女1「ジュリアン…？ジュリアンどこに行ったの！？ジュリア、」

男1「(立ち上がりながら) 多くない!？」

舞台中央に照明。動き始める男2と女2。

3人「え？」

男1「悲しみの回想が多くない!?なんでそれずっと視ないといけないんだよ！よく晴れた午後の日に悲劇が起こるね…:ていうかお前(上手にいる女1に)なんでまだそこにいるんだよ！座ってる体だろ！戻れ！」

男2「どうしたどうした太郎？急に」

男1「いやその…彼女がなんか…けっこう色々なことで悲しんでる様子だからさ…」

女1「私が…なんか空気悪くしちゃってるってことだよね…:ごめんなさい…」

男2「香奈ちゃんは悪くないよ。元気ない時は誰でもあるってー。(男1にひそひそ話) :変な空気にすんなよ。お前は彼女いるから良いかもしれないけどさ、俺はこの場を大事にしてんだよ」

男1「…ごめん。じゃあまあとにかく、さっきまでの話題はもう絶対に出すなよ」

男2「えっと、なんだっけ？」

男1「だから…! (声を荒げながら) 犬猫ぬいぐるみの、」

女1「犬猫ぬいぐるみ…?」

悲しいBGMが流れる。女1、俯いていく。舞台上手はけ口から犬、猫、黒子がチラチラと顔を出している。

男1 「いくなくなくなー！このくらいの確認は我慢してくれえ！とにかく違う話題にしよう！…キミも、悲しんでばかりいるのもよくないよ？今日は皆で楽しもうよ！ね？」

女1 「そうだよね…確かにあなたの言う通り、だよね…よし。今日はもう楽しむ、楽しんじやう！ふうー！ふうー！！」

女2・男2 「ふうー！…！！」

男1 「情緒心配になるなこの娘…まあでも、元気になったし良いか」

女1 「今日はもうジャンジャン飲んでわよー！カクテル？やめやめ！ビールビール！…店員さん！お兄さん！注文ー！お兄さん！お兄さん！お兄さん…？」

悲しいBGMが流れる。女1、俯いていく。

男1 「自分で踏みやがった！」

上手側に照明。男2と女2は止まる。マコトが現れ、女1の台詞に合わせて動く。

男1 「もう今度はなんの回想だよ…」

女1 「お兄さん…マコト兄さん…」

男1 「え？今度は普通に男？」

女1 「マコト兄さんとの出会いは、中学生の時だった。彼はスポーツ万能で、ぶっきらぼうだけど時折見せる優しさに…私はどんどん惹かれていった。でも！別れの日は突然やってきた！」

男1 「出た。いつものやつ」

女1 「マコト兄さんは…死んでしまった」

男1 「え？」

女1 「彼は自分の友達を守るために…死んでしまったんだ…」

男1 「ええ…嘘でしょ…？ここにきて本当に重いタイプの回想くる？」

女1 「マコト、兄さん…」

舞台中央に照明。動き始める男2と女2。

女2 「あれ？香奈大丈夫？…もしかしてまた彼のこと、思い出してたの？」

女1 「うん…」

女2 「こんなこと言いたくないけどさ…もう乗り越えなよ！」

女1 「無理だよ…」

男1 「ちよつと菅原さん、そういう言い方はちよつと…」

女1 「だってマコト兄さんは…私の理想の人だったの！」

女2 「まあ確かに…友達の身代わりになった第12巻の彼にはグツときたけど」

男1 「漫画の話！？今の！？漫画のキャラだったのマコト兄さん！？」

男2 「少女漫画『キラキラ☆ハイスクール』に出てくるマコト兄さんね」

男1 「なんでお前は知ってたんだよ。ていうか漫画のキャラの死を回想挟んでまで引きずってんじゃねえよ！」

女1 「推しのキャラが死ぬことにリアルも漫画も関係ないわよ！キー！」

男1 「キー！ってリアルで言ってる人初めて見たわ」

女2 「ごめんねこの娘ちよつとすぐ感情移入しちゃうからさ」

男1 「だろうね」

女2 「なんか物とかく無機物の話だったら大丈夫だと思う」

男1 「無機物…」

女2 「家電の話とかしない？」

男1 「合コンで家電の話って…まあだったら…俺、掃除苦手だから今度安めのルンバでも買おうかと、」

悲しいBGMが流れる。

男1 「ちくしょう！ルンバもか！？ルンバにも愛着持ったのか！？」

下手側に照明。女1と女2は止まる。

男2 「(立ち上がりながら) 先週ルンバが壊れた…」

男1 「お前かい！今度はお前かい！」

下手からルンバを操る黒子が現れる。

男2 「俺は長年使っていたルンバのルンルンちゃんに愛着を持っていた」

男1 「ネーミングセンス」

男2 「でも壊れる時はあつけない。あんなに大事にしていたのに…何がいけなかったんだ…」

男1 「まあ家電だし…寿命とかもあつたんじゃないの？」

男2 「充電はしっかりした。無茶な掃除もさせなかった。掃除がない時は、俺の愛犬とも遊ばせてやったのに」

下手から犬2が現れ、ルンバと激しく遊ぶ。

男1 「それじゃない！？そりゃ壊れるよ！（立ち上がりながら）遊ばせるな犬と！」

女1 「犬…？」

男1 「しまった」

悲しい BGM が流れる。↓男2の BGM にかぶせてくる。

男1 「回想をかぶせてくるな！」

上手側にも照明。犬が現れる。

犬 「わんわん！」

女1 「ポチは、私が去年から飼い始めた、」

男1 「もう見たもう見た！その回想！」

下手側の犬2と上手側の犬が中央でぶつかってしまふ。両者、『あ、なんかすみません』みたいな動きをする。

男1 「回想同士が干渉するな！」

犬と犬2が舞台前方で『よろしくです』みたいに握手をする。

男1 「だから回想の犬同士が仲良くするな！まとめて保健所連れてくぞ！」

犬 「保健所…？」 犬2 「わんわん…？」

悲しい BGM が流れる。舞台前方・後方中央に照明。保健所の人が見れる。

男1 「なんで回想の犬まで回想入るんだよ！どういふことなんだよ！帰れ！…もうやめやめ！一旦皆戻ってきて！」

舞台中央に照明。回想のキャラ達、全員はける。

男1 「…まあさ、悲しいことをいきなり忘れろって方が無理かもしれないけどさ。ちよつとしたことでいちいち思い出したら、心も体もたないよ。悲しい時こそさ、逆に笑ってやれるくらいの、」

着信音。

男1 「スマホを取り出し、席から離れながら）あ、ちょっとごめん。（電話に出る）もしもし…何？美雪…え？今？いや…ちょっと外にいるけど…何？え？なんで怒って、え？ちよなんて合コンのこと知って、いや、それはホント無理やり連れられたとかそんな感じで、え？違うって、ちょっと別れるって、いや、なんでちょっと待って…！」

『ツーツー』とさうSE。

間

悲しいBGMが流れる。舞台中央前方に照明。照明に入る男1。

男1 「彼女との出会いは…3年前だった」

徐々に暗転していく。

男1 「うん…悲しいもんは悲しいわ！ごめん！」

「カーテンコール」

【登場人物】

演出

役者 1

役者 2

役者 3

役者 4

役者 5

役者 6

役者 7

役者 8

その他出演者

暗転中、カーテンコールっぽい明るいBGMを大音量で流す。(明転と同時にBGMを小さくする)。役者がカーテンコールの感じで並んでいる。明転。

役者1 「本日はご来場頂きありがとうございますございました!」

役者2 「え〜今から皆さんに何点かお知らせがあります。まず1つ目ですが、このあとこの会場内で役者と一緒に写真が撮れるチェキ会をやりませう!」

役者3 「よ!チェキ会!」

役者2 「チェキは1枚1000円です!」

役者3 「安い!」

役者2 「えーチェキを撮られない人は正直ちょっと邪魔になってしまうので、お早めにお帰りください!」

役者3 「お帰りください!」

役者2 「(にやけながら) お前さつきからうるさいっての!」

役者3 「(にやけながら) すいません!」

役者4 「えー次に1つ目、じゃなくて2つ目ですが、えっとですね…あの…書くやつ、アンケート!お手持ち、じゃなくてお手元にあの…アンケートがあると思いますのですが…」

役者3 「(にやけながら) 大丈夫?落ち着け落ち着け!」

役者4 「すいません、あの…書いてくれると、頂けると良い、なーと!」

役者3 「はい、もうグダグダさせちゃったから罰ゲームやってもらいまーす!」

役者4 「えー!?!やだやだやらないよ!」

役者3 「いやいや、これはもう一発ギャグくらいやってもらわないとですよ!」

役者4 「ええ?一発ギャグ?いやホントそういうのは無理だってホント!」

役者1 「なんでも良いからなんでも良いから早く!」

役者3 「はいじゃあカウントダウン、3、2、1、はい!」

役者4、何か一発ギャグをする。

間

役者4 「いやホント無理なんだって!」

役者数人 「乾いた笑い」 ははははは

役者5 「はい、ということでアンケートにご協力くださいってことでした!。あ、さつき言ったチェキもよろしくです。皆さんお願いしまーす!」

役者数人 「(ばらばらに) お願いしまーす!」

役者1 「では最後に皆さん何か告知とか、ある人いますか?」

全員 「はい！」（手を挙げる）

役者1 「いや全員からい！じゃあ1人1人聞くのもめんどくさいので、もう全員一斉に言うてください。せーの」

全員 「（各々告知っぽいこと言う）」

間

役者1 「…はい！えーでは皆さん、改めまして本日はご来場頂きありがとうございます！」

全員 「ありがとうございます！」

役者1 「そして皆さん…！チェキも…よろしくお願いします！」

全員 「よろしくお願いします！」

役者達、下手からはけようとする。

演出 「待て待て待て待てえ！！」

演出、上手から出てくる。

演出 「ちよっと待て！！」

間

役者、はけようとする。

演出 「いや待ってえ！はけようとししないで！」

役者1 「なんですか演出」

演出 「いやなんですかじゃないよ。何今のクソみたいなカーテンコール」

役者1 「え？駄目でしたか？」

演出 「駄目だろ。かなりレベル高い方の駄目だったよ。いや本番前に練習させておいてよかったわ。え？お前ら今のカーテンコール本番でもやろうとしたの？」

役者1 「いやいや流石に同じではないですよ」

演出 「だよな？」

役者1 「一発ギャグはウケるまでやらせます」

演出 「地獄か。じゃあ一生終わらねえわカーテンコール」

役者3 「（役者4）言われてんぞ」

役者4 「ちよっとちよっと」

役者全員 「ははははは！」

役者達、下手からはけようとする。

演出「いや帰ろうとすんな！戻ってこい！お前らさ、さっきみたいな一発ギャグは絶対やめろよ！絶対寒くなるから！お前から分かってんのか？今回の公演は、今大人気のネットドラマ『ザ・ドクターファイト』の舞台版なんだぞ？」

役者1「いや古澤さん、全員分かってますよ。今更」

演出「分かってたら今みたいなのカーテンコールにすんなよ！良いか？この公演は俺達劇団クロサワのチャンスなんだ。最後まで綺麗に締めようぜ」

役者1「そんなこと言われても」

役者2「今のカーテンコール」

役者3「一体何が駄目だったって言うんですか!？」

演出「なんだそのチームワークは。だからまず、チェキを押し過ぎなんだよ!」

役者1〜3「え？」

演出「お前らことあるごとにチェキの宣伝挟んでたよな？最後のありがとうございましての後にも入れてたよな？なんだあれ」

役者1「いや古澤さん聞いてください。これには理由があるんですよ。(役者達に)なあ？」

役者全員、神妙に頷く。

役者1「(神妙に) …チェキは、金になるんです」

演出「なんだその理由。神妙に何言ってるんだ」

役者1「チェキは役者の貴重な収入源なんですよ〜良いじゃないすか〜どの団体もやってみますよ〜? 1枚1000円で売らせてくれよ〜チェキ〜」

演出「いや別にチェキは良いけどさ。なんかチェキを撮らないお客さんのこと悪く言ってるの？ なかったか？なんて言ってた？」

役者2「いや金ヅルにならない奴は早く消えろって」

演出「さっきより酷くなってない？だからそういうこと言うなってるの。良いか？チェキってのはあくまで公演のおまけだからさ。チェキのための公演みたいにするんだよ。公演の内容がよかったら、しつこく宣伝しなくても撮ってくれる人は現れるんだから。な？」

役者1「分かりました古澤さん…1枚、800円にしときます」

演出「いつ金の話した？話聞いてた？」

役者1「じゃあ私達は」

役者2「1枚1000円で」

役者3「チェキを売っても良いんですか!？」

演出「知らねえよ！良いんじゃないの？とにかく、宣伝はあんまりしっこくするなよ。あとそのことだけじゃなくて、なんか最後の…告知みたいなやつ？なんかすごいごちゃごちゃしてたな？何あれ？」

全員「(各々告知っぽいこと言う)」

演出「それだよそれ！なんで一斉に言うんだよ。聞こえる訳ねえだろ。なんて言ってるんだよ」

全員「(各々告知っぽいこと言う)」

演出「うるせえうるせえ！もう一回やれってことじゃないよ！それ怖いんだよ！ビクッてるんだよそれ！ていうかそれホントにちゃんと告知してるのお前ら？お前は、なんて言ってるんだよ」

役者6「一か月後に世田谷の会場でコメディの舞台やりますって」

演出「お前は？」

役者7「YouTubeの個人チャンネルでゲーム実況やってますって」

演出「お前は？」

役者8「いつもいつも、古澤の怒鳴り声うるせえなって」

演出「俺の悪口じゃねーか！どさくさに紛れて何言ってるんだお前！」

全員「(各々告知っぽいこと言う)」

演出「怖い怖い怖い！なんで今言ってきた！？せめてさあ、誰か1つのに統一して言えよ」
全員「(いつもいつも古澤の怒鳴り声うるせえな)」

演出「悪口を統一すんじゃないやねえよ！そもそも役者ごとの告知なんてパンフレットにも書いてあるんだからわざわざここで言わなくても良いんだよ！」

役者1「さっきから」

役者2「言うな言うなって」

役者3「それじゃあ一体」

役者8「私達は」

役者7「何を言ええば」

役者6「良いんですか！？」

演出「そのチームワークは何なんだよ。いやだから、カーテンコールはあんまり長くしないで良いんだって」

役者1「3・6・8「え？」」

演出「確かにカーテンコールで色々喋りたい気持ちには分かる。けどな…そういう身内のノリみたいなので盛り上げられるのは、共演者と一部のファンだけだから！おいてかれてるお客さんもいるんだから、程々にした方が良いんだよ！長くすんな！上演時間っていうのはな、カーテンコールが終わるまでの時間なんだよ！」

役者1「古澤さん…カーテンコールに親でも殺されたんですか？」

演出「いやまあちよっと…熱くなり過ぎた…申し訳ない。とにかく、カーテンコールはち

「やんとやってほしい。変に長くしないで、シンプルに頼むよ」
役者全員 「はい」

演出 「それじゃあもう一回、やってみろ」

演出、上手端に寄る。役者達、冒頭の立ち位置に戻る。

役者1 「…本日はご来場、ありがとうございます！」

役者2 「チェキ会！」

役者4 「アンケート！」

役者3 「よろしく！」

全員 「私達色々やってるぜ！…チェキ会！…！」

全員、演出の方を向く。

演出 「んんそれでもやっぱりチェキ会の主張が目立つ！」

役者達、『あちゃー』のポーズ。暗転。

「ザ・ドクターファイト」

【登場人物】

姉

弟

ナレーター

主人公

院長

能力者

女

キャプテン

闇魔界の霸王

ランプの精霊

敵 1 ～ 2

敵スパイ 1 ～ 2

強敵 1 ～ 7

舞台上手は映像サイド、下手は部屋椅子2つ。上手に主人公とナレーター。下手に姉と弟が座っている。

上手に照明。PVっぽいBGMが流れる。↑の台詞に合わせて動く主人公。

ナレ「全ての物語はここから始まった！誰もが投げ出すオペに挑み続ける男、ドクタージ

ョー！しかし相手はオペだけじゃない…！院内の闇にも立ち向かう！」

主人公「それでも俺は、治すだけだ」

ナレ『ザ・ドクターファイト』シーズン1…このオペを、乗り越えろ」

下手に照明が切り替わる。主人公とナレーター、はける。

姉「今のCMって…お前が観てるって言ったネットドラマ？」

弟「そうそう。めっちゃ面白いよ姉ちゃん、このザ・ドクターファイト。シーズン数多いけど次々観ちゃうから」

姉「へーけっこう続いているんだ。まあネットドラマは人気出るとすぐ次のシーズンやるものもあるもんねえ」

弟「姉ちゃんも絶対これ観た方が良さよ。俺このドラマのめっちゃくちゃファンでさー。

ホントめっちゃ好きで全部のシーズン繰り返し観てるからね」

姉「へーそんなファンなんだ。何回くらい繰り返したの？」

弟「3回」

姉「そんなでもねえな。3回ではめっちゃくちゃなファンとは言えないよ」

弟「いやでもホントシーズン数が多いんだよ、このザ・ドクターファイト」

姉「いやそれでも本当のファンだったらもっと観てる人もいるでしょ。何？シーズン10くらいまでやってるの？」

弟「シーズン1027かな」

姉「1027!？」

弟「1027」

姉「1027まで続いているの!？」

弟「そして1シーズン12話」

姉「だったらファンだわ！1027シーズンを3回繰り返して観てるんだったらめっちゃくちゃなファンだわ！」

弟「ありがとう」

姉「うわなんかすごい興味出てきたわこのネットドラマに。何？医療系の話なんだよね？」

弟「あーまあ、広く言えばそうかなー」

姉「え？違うの？」

弟「最初はね。流石に内容もちよとずつ変わっていった」
姉「まあ1027シーズンもやってたら変わっていくか。医療系からどんな風に？島耕作みたいにどんどん出世していくとか？」
弟「えっと…甲子園目指したりするね」
姉「どっから出てきた？甲子園？医療系のドラマなんだよね？」
弟「まあ広く言えばね。でも主人公が甲子園目指してるシーズンもあるんだよ」
姉「あ、もしかしてシーズンごとに設定とか変わるの？」
弟「いや全部同じ世界設定」
姉「どういう構成してんの…」
弟「他には…超能力者と戦ったりもするね！」
姉「もうあんまり驚かないわ。甲子園が先に来たから。どうせなんかテレパシーとか火操ったりする能力が出るんでしょ？」
弟「いや他人の悲しい回想を覗く能力とかだよ」
姉「どういう能力？それはちよと驚いたよ」
弟「そういう力を持った奴が出てくるんだよ。意外と厄介な相手なのよ。回想を視てどんどんその人の秘密を暴いていくからさ。良いスパイになるのよ」
姉「スパイとかも出てくるんだね。そいつ敵なの？」
弟「うん。まあそいつ自身にも悲しい過去があるのよ。それで心が病んじゃってさ、敵に」
姉「あーなるほど。見たくもない他人の悲しい回想を見過ぎて病んじゃうのね」
弟「いや彼女に電話でフラれて」
姉「理由よわ！なんだそいつ。じゃあ他の超能力は？もつと派手な能力もあるでしょ？」
弟「派手な能力か…他人のお腹の中を視て腹痛かどうか分かる能力、」
姉「地味じゃないそれ！？腹痛かどうか分かるだけって…」
弟「いやでもお腹の中の菌とかが擬人化されて視えるからけっこう面白いよ」
姉「ええ？まあよく分かんないけど…なんか全体的に地味だな、超能力が」
弟「逆にそういう能力を駆使して戦うのが面白いのよ。まあ今みたいな超能力者とか、複雑な暗号を使うスパイとか、あとちよとついでこれないかもしれないけど…」
姉「…！ファンタジー要素も入ってきたりする」
姉「いや今更ファンタジーくらい何ともないわ」
弟「よかった。闇魔界から霸王が復活するんだけど」
姉「闇魔界から霸王が？どういう日本語？ファンタジーが過ぎない？それ」
弟「まあとにかく他にも色んなジャンルの奴らが出てくるかな」
姉「うん…医療系のドラマなんだよね？」

間

弟「広く言えばね」

姉「便利だね！その言葉」

弟「まあ口で説明してるだけじゃあなんだし、今からダイジェスト映像でも観ない？」

姉「ダイジェスト？だって1027もあるんでしょ？ダイジェストでも長いでしょ」

弟「いやそんなことないよ。すぐ観終わるよ」

姉「いやいや…全シーズン3回繰り返してるやつと同じ時間間隔にしないで」

弟「いやでも、5分だよ」

姉「5分！？」

弟「5分」

姉「5分でシーズン1027をまとめたの？それはちょっと…観てみたいかなあ…」

弟「ようこそドクターファイトの世界へ」

姉「やかましいわ。ウキウキすんな」

弟「よしそれじゃあ、早速観よう」

弟、リモコンを操作する。上手にも照明。PVのBGMが流れる。主人公とナレーターが出てきて、台詞に合わせて動く。

※以降、展開に合わせて登場人物が出たりはけたりする。

ナレ「ザ・ドクターファイトの今までが5分でバッチリ復習できちゃうダイジェスト！」

姉「マジで5分なんだ」

ナレ「彼の名前は竹内ジョウ。通称ドクタージョー。流浪の凄腕ドクターだ。普段はクルだが、その内には熱いものを持っている」

院長「竹内君…金にならない手術はしないよ」

主人公「院長…！あんたって人は…！」（院長を殴ろうとする）

院長「何だ？私を殴るのか？」

主人公「…殴らないさ。俺の両手は商売道具だ。人を助けるためにある。殴るためじゃない」

姉「そういうポリシー良いね」

主人公「（食い気味に）だから蹴る！」（院長を蹴る）

姉「蹴るんかい！」

院長「ぐわあ…！」（倒れる）

ナレ「その後も様々な困難を乗り越えていくジョー」

敵1「私のオペを優先しろ！そんなクズどもよりも先になあ！」

主人公「おらあ！」（敵1を蹴る）

敵2「残念だが…キミをクビに！」

主人公「おらあ！」（敵2蹴る）

姉 「こいつ何でも蹴って解決するな！ドラマ最初の頃でもけっこうイカれた内容だぞ」
院長 「貴様、一体何なんだ…！なぜだ…！なぜ一介のドクターにそれほどのキック力が…！」

姉 「そこはどうでも良いだろ。素性とか気になれよ」

主人公 「俺の過去だけは…誰にも教えられねえよ。絶対にな…」

姉 「やっぱりこいつヤバイ過去を？」

ナレ 「しかし…院長は超能力を持ったスパイを送り込む」

姉 「超能力？まさか…」

能力者が現れ、主人公に手をかざす。悲しい BGM が流れる。

ナレ 「暴かれてしまう、ジョーの悲しい過去！」

姉 「出た！悲しい回想を視る能力者だ！」

ナレ 「ジョーの回想、過去…彼は学生時代、野球部でピッチャーをやっていた」

姉 「野球編ってこいつの過去だったんだ！」

ナレ 「竹内ジョウは高校二年の時、投げれば50%で肩が壊れると言われた試合に、チームのキャプテンに無理やり投げさせられ、その日肩を壊してしまう…！」

姉 「最低だなこのキャプテン。それはジョー可哀想だったな…」

ナレ 「ジョーは…その試合は何事もなく投げ切ったが、その後の打ち上げでテンションが上がり激しいパラパラを踊った結果、肩を壊してしまったのだ…！」

姉 「何やってんだよ！」

ナレ 「失意に暮れるジョー」

姉 「自業自得だよ」

ナレ 「あらゆる医者も彼の肩を治すことはできなかった」

主人公 「クソ…！医者なんて、頼りにならねえ…！結局、自分の力で道を切り開くしかないんだ…！」

姉 「あ、これで医者を目指すのか」

主人公 「俺は…サッカーをやる！」

姉 「は？」

ナレ 「こうしてジョーは素晴らしいキック力を手に入れたのだ！」

姉 「これキック力のための過去編だったの！？医者にはどうやってなったんだよ！」

ナレ 「更に明かされていく、ジョーの衝撃の過去…！」

主人公 「俺に、医師免許はない」

姉 「無免許なのかい！だから昔のこと知られなくなかったのね！」

弟 「入り込んでるね〜」

姉 「やかましいな。いや色々ぶっ飛んでるからさ。ていうかヒロインとかはいないの？」

さつきから全然女っ気ないんだけど」

弟「あーそういう人が出ることもあるかな。まあ観てれば分かるよ」

ナレ「様々な過去をスパイに暴かれてしまったジョー。世間に公表しないことを条件に、院長からジョーもスパイになることを命じられる」

院長「（主人公を指しながら）今日からスパイ」

ナレ「そう、院長は医者とスパイ、2つの顔を持っていたのだ」

姉「何者なんだこいつは」

ナレ「ジョーは早速任務を命じられる。敵スパイが持つ極秘資料を入手することだ」

院長「この任務は2人で行え。バディを紹介する」

女「キミが例の新人君？」

姉「あ、この人がヒロイン？」

弟「この人は、ただの痴女だよ」

姉「ただの痴女！？どういうこと！？」

女「ばーい」

弟「なんかちよいちよい出てくるんだよねーこの人。でも人気あるのよ」

姉「そうなんだ…」

ナレ「ジョーのバディ、相棒とは…学生時代一緒の野球部だった、キャプテンであった」

キャプテンが出てくる。

姉「こいつで大丈夫！？超心配なんだけど！というかこいつもスパイになってたんだね」

ナレ「任務中、キャプテンの裏切りに合うジョー」

姉「早速だよ！ほらもうこういう奴なんだよ！」

ナレ「ジョーは敵のスパイ達に囲まれてしまう」

スパイ1・2が出てきてキャプテンと一緒に主人公を囲む。

ナレ「絶対絶命の中…とうとう目覚めるジョーの超能力！」

姉「ジョーにも能力が？良いね良いね！熱い展開だ！」

主人公、スパイ達に手をかざす。「キューーン」というSE。

主人公「お前ら…下痢だな」

姉「腹痛かどうか分かる能力だこれ！」

主人公「体内の善玉菌が弱ってるぜ」

ナレ「ジョーは持ち前のドクターとしての知識と相手のお腹の状態が分かる能力を上手く合わせることで、次々と敵スパイを撃破していった！」

→の台詞中、主人公は全て蹴りでスパイ達を倒す。

姉「全部キック力で勝ってるけど」

弟「まあこれはダイジェストだから。テンポ重視だね」

キャ「馬鹿め…！俺達を倒したところで、もう遅い…！召喚の儀式はすでに始まっている！」

ナレ「そう、敵スパイの持つ極秘資料とは！閻魔界から霸王を復活させる方法が書かれたものだったのだ！」

姉「出た！閻魔界の霸王！」

ナレ「急いで現場に向こうジョー。しかしすでに儀式は終了していた。召喚されてしまう、閻魔界の霸王！」

霸王「ふっふっふ…我が地上の全てを破壊してやる、」

主人公「おらあ！！」（霸王を蹴って倒す）

姉「キック力で勝ってるけど！？」

弟「まあこれはホントこんな感じ」

姉「こんな感じなんだ！？霸王なんだからもう少し丁寧にやってあげて！」

ナレ「そしてその後も…次々と襲いかかる強敵達！」

強敵1〜7が次々と出てくる。

姉「急に雑じゃない？ダイジェストめんどくさくなってない？仮にもなんか強い奴らなんでしょ？」

強敵1〜6、順々に後ろを向くと各人自分の役について書いて書いてある。(強敵1「プロ棋士」↓強敵2「プログラマー」↓強敵3「骨董品マニア」↓強敵4「カルタ名人」↓強敵5「ウノチャンピオン」↓強敵6「タピオカリーダー」の順番)

姉「…こいつら全員文化系だな！腕つぶし強い奴も出てこいよ！」

強敵7、振り向くと「ハムちゃんずのファン」と書いてある。

姉「なんだハムちゃんずのファンって」

強敵1〜7「うおおおお！！」（主人公に突撃する）

姉「いやこいつらじゃ勝てないって！あのキック力にやられるって！」

主人公「おらあー！」（まとめて殴って倒す）

姉「蹴られもしない」

強敵3「強い…！流石は噂に名高いドクタージョー…！」

姉「もうドクター要素ゼロだけだね」

ナレ「しかし…追い詰められた骨董品マニアはとんでもないアイテムを取り出す」（強敵

3、ランプを取り出す）

強敵3「（ランプをこすりながら）いでよーランプの精霊！」

ランプの精霊が現れる。

姉「そんなのまで？ホント何でも有りだね」

精霊「ふっふっふ…お前の願いを叶えよう」

強敵3「あいつを、ドクタージョーを…ぶっ潰してくれええ…！」

精霊「承知した」

ナレ「ジョーに襲い来るランプの精！しかし絶対絶命のジョーに、最強の助っ人が現れる！」

霸王「ドクタージョー…我以外にやられることは、許さんぞ！」

姉「え？この声は、まさか…！」

キャプテンが現れる。

姉「お呼びじゃない！」

更に霸王が現れる。キャプテンは主人公に蹴られ、はけていく。

姉「霸王だ！閻魔界から戻ってきたのか！？なんて熱い展開だ！」

ナレ「ついにあの2人の共闘！協力してランプの精霊と戦うジョーと霸王！」

→の台詞中、精霊の攻撃を全て、霸王を盾にして防ぐジョー。

姉「霸王ばっか盾にされてない？」

ナレ「そしてついに…彼らはボロボロになりながらも、ランプの精霊に勝利する」

姉「ボロボロなのは霸王だけだよ」

精霊「参った…お詫びに、新しい主人であるあなたの願いを1つ叶えよう」

主人公「願い…？」（霸王を心配そうに見る）

霸王「ふん…私の傷のことは気にするな…自分の好きなことを願え」

ナレ「しかし…霸王は傷が回復しないと、また1人孤独な閻魔界へと封印されてしまうの

だ」

姉「霸王…」

主人公「ふっ…初めから、願いなんて決まってる。精霊よ…治してくれ！」

姉・霸王「ジョー…!」

主人公「俺の壊れた肩を治してくれ！」

姉・霸王「貴様…!」

霸王、勢いよくはけていく。

ナレ「こうして肩が治ったジョーはプロの扉を開く!ザ・ドクターファイト!プロ野球

編!」

姉「また野球かい!!もうタイトル変えろよ!」

ナレ「これで…ダイジェストは終了だ」

姉「あ、終わり?」

ナレ「しかしこれはジョーの活躍のまだまだ一部。本編も、観たくなっただろう?」

姉「いやまあ…色々な意味で面白そうなネットドラマではあったけど…」

弟「ようこそドクターファイトの世界へ」

姉「やかましいわ」

ナレ「最後に…次回、最新シーズンの新情報があるぞ!」

弟「え?なんだろう?これは僕も知らないな」

ナレ「あなたは…衝撃を受ける!」

姉「いやここまできたらどんな内容でも驚かんわ」

ナレ「ネクストシーズン、ザ・ドクターファイトシーズン1028…最終回!」

姉・弟「「ええええええ!」」

暗転。

敵
1
3

老
黒服

黒服
6

黒服
5

黒服
4

黒服
3

黒服
2

黒服
1

女

男

【登場人物】

「7人の黒服」

舞台前方にベンチ。男と女が座っている。舞台中央ラインに黒服（サングラス）が6人、等間隔に並び（上手側から順々に1〜6）、上手後方端にトランシーバーを持つ老黒服がいる。

明転。

男「はー（息を吐く）やっぱり…外はまだまだ寒いなあ」
女「そうだね。もうちよつと着てくればよかったかも」
男「あーごめんな理恵子、急にこんな公園に呼び出して」
女「ううん。全然大丈夫だよ、村田君」
男「そつか…ありがとう」
敵1「びゃ〜」

敵1、後ろから小走りで現れ真ん中の黒服3・4の間を抜けていこうとする。黒服3・4、正面を向きながらそれを防ぎ、敵1を追いやる。敵1、『わ〜』と言いながらはけていく。

女「それで…何？話って。改まってさ」
男「ああ、うん…そうだよな」
女「…ちよつと何々？何？真面目な話？」
男「理恵子…茶化さないで、聞いてほしいんだ」
女「…うん、分かった」
敵2「びゃ〜」

敵2、後ろから小走りで現れ上手側の黒服1・2の間を抜けていこうとする。黒服1・2、正面を向きながらそれを防ぎ、敵2を追いやる。敵2、『わ〜』と言いながらはけていく。

男「俺さ…やっつと、気付いたんだ」
女「え？」
男「自分の、お前への…正直な気持ちに」
女「村田君…」
敵3「びゃ〜」
老黒服「またそっちにいった」（以降基本的に老黒服はトランシーバーを使って会話する）
黒服1・2「了解」

敵3、後ろから小走りで現れ上手側の黒服1・2の間を抜けていこうとする。黒服

1・2、それを防ごうとするが、敵3が強く抵抗する。黒服1・2、後ろを向いて防ぐ。黒服1・2の背中に『善玉菌』と書かれている。敵3を追いやる。敵3、『わゝ』と言いながらはけていく。

男 「聞いてくれ理恵子…俺は、俺は…！」

老黒服 「どうやら今日は主にとって大切な日」

男 「くそ…！駄目だごめん…緊張しちゃって」

老黒服 「緊張のせいで普段よりも奴らが多い。皆、気を引き締めて守れ」

女 「大丈夫だよ、村田君。ゆっくりで」

男 「ありがとう」

敵1・2 「びゃ〜」

老紳士 「マズイ、2体同時にいったぞ！」

黒服達 「何？」

敵1・2、後ろから小走りで現れ敵1は上手、敵2は下手側の黒服の間を抜けていこうとする。黒服1・2、5・6がそれを防ごうとするが、2体とも強く抵抗する。

黒服1・2・6、後ろを向いて防ぐ。黒服6の背中にも『善玉菌』と書かれている。

敵1は追いやれる（そのままはける）が、敵2は黒服5・6の間を突破する。

黒服6 「クソ！抜かれた！」

敵2、男の正面まで近づき、後ろを向く。背中に『なんか悪い菌』と書かれている。

男のお腹にダメージを与える。

男 「うっ…！」（お腹を押さえる）

敵2、『びゃ〜』と言いながらはけていく。

黒服6 「ぐふ…！」

黒服6もダメージを負いながらはけていく。

黒服2 「善玉先ばーい…！」

老黒服 「どうとうお腹にダメージが…」

黒服1 「くっ…！やはり緊張時は奴らの動きも活発になっている…！」

男 「うう…！」

女「え？村田君、大丈夫？なんだか顔色が…」

男「大丈夫、大丈夫だよ…！」

敵1〜3「びゃ〜」

老黒服「クソ！次は3体だ！」

敵1〜3、後ろから小走りで現れ黒服達の間を抜けていこうとする。黒服1・2、3、4・5の3組がそれを防ごうとするが、3体とも強く抵抗する。黒服5以外、後ろを向いて防ぐ。黒服3・4の背中にも『善玉菌』と書かれている。敵1は追いやれる（そのままはける）が、敵2・3は黒服3、4・5の間を突破する。

黒服3・4「やられたー！」

敵2・3、男の正面まで近づき、男のお腹にダメージを与える。（敵3の背中にも『なんか悪い菌』と書かれている）

男「ううっ…！」（お腹を押さえながらうずくまる）

敵2・3、『びゃ〜』と言いながらはけていく。

黒服3・4「ぐぐぐ…」

黒服3・4もダメージを負いながらはけていく。

黒服2「善玉ブラザーズー…！」

老黒服「現場から3体も…！」

男、小さく深呼吸しながらもじもじ体を揺らしている（うんこを我慢する時の動き）。

女「あの…ホントに大丈夫？」

男「…超平気だけど？（キリッと）」

女「なら良いんだけど」

黒服1「そんな訳ない！もうかなりギリギリのはずだ…！」

老黒服「良いかお前ら！最悪の事態、コード『GOR』だけは絶対に阻止するのだ！」

黒服1「はい隊長！」

黒服2「すみません先輩、コードGORとは？」

黒服1 「ちゃんと勉強しておけ。GORとは GERIOMORAST 下痢お漏らしの略称だ」

黒服2 「それは最悪だ……！」

老黒服 「主の強い意思のおかげでなんとか均衡は保たれておるが…現場の菌達！頑張るのだ！」

黒服1・2 「はい！」 黒服5 「はい！」

黒服2 「お前(黒服5)！なんだそのやる気のない返事は！」

黒服1 「そういえばお前…先ほどまでの働きもよくなかったな」

黒服5 「へっへっへ…なんでだと、思う？」

黒服1 「何？」

老黒服 「待て…！お前まさか…善玉菌ではないな！？」

黒服5 「へっへっへ…お察しの通り俺は」(振り向く)

黒服5 「悪玉菌だ！」(背中に『悪玉菌』と書かれている) 黒服1・2 「悪玉菌か！」

黒服2 「お前…！一体いつから…！？」

黒服5 「文句なら主に言いな！食生活が乱れているのがいけないのさ！」

黒服1 「確かにここところ、カップラーメンばかりだったが…！」

黒服5 「もう俺はただの悪玉菌！お腹に悪いことをするぜえ！！カモン、悪い菌たち！」

敵1〜3、『びゃ〜』と言いながら現れる。

黒服5 「これで現場は4体2！GORは避けられねえぜえ！」

黒服2 「舐めやがって…！」

黒服1 「隊長、武器を送ってください！」

老黒服 「支給班、彼らに武器を」

黒服5 「(武器の爪を装着しながら)馬鹿め…お腹の状態によりお前らの武器の強さは変わるのだろうか？このお腹の状態じゃあ…」

黒服1・2、はけ口から武器を受け取り、黒服1(ハエ叩き)↓黒服2(パチンコ)という順番で出す。

黒服2 「碌な武器じゃない！」

男 「うう…！」

女 「やっぱり辛そうだけど…？」

男 「いやちよっと…寒くて、ね…」

女 「寒いのがあったら…」

女、ポケットからホッカイロを取り出す。『びあぁー』とごうSE。

女「これ、使う？」

男「それは…」

男・黒服達「ホツカイロ!？」

男「もらっても、良いの…?」

女「うん私は平気。むしろなんか緊張してちょっと暑くなってきちゃって。だから使つて」(ホツカイロを男に渡す)

黒服2「隊長…隊長!」

老黒服「うむ…腹痛の天敵、冷えを直接打ち消せる…!」

黒服1「奇跡だ」

黒服5「ふざけんな…!やめろ…やめろおお…!」

男、ホツカイロをお腹に貼る。『ほわくん(もしくはばああ…!)』というSE。

黒服2「力が…湧いてくる…!」

黒服1・2、はけ口に入れると武器がライトセーバーとマシンガンに換わる。

黒服5「武器も強くなりやがった!グレード上がり過ぎだろ…!」

女「あとそうだ。近くに自販機があったから、温かい飲み物でも買ってくるね」

女、はける。

黒服5「温かい飲み物だと…?これ以上お腹に良い物がくる前に、やっつけてしまえ!お前ら!」

黒服1・2「いくぞ…!」

黒服1・2と敵1〜3の殺陣。1アクションごとに『うっ…!』とダメージを受ける男。

老黒服「激しい戦いはお腹に響く!短期決戦だ!」

更に何アクションか殺陣をした後、敵3が黒服1に抱きつく。

黒服1「何!？」

黒服5「よくやったあ!」

敵3ごと黒服1を攻撃する黒服5。倒れる(はける) 敵3。

黒服1 「ぐうっ…！」(片膝をつく)

黒服2 「こいつ…味方の菌ごと…！」

黒服5 「はっはー！これで俺達の優勢に戻ったなあ！」

老黒服 「そいつは…どうかな？」

女、両手に1本ずつペットボトルを持って出てくる。

女 「お待たせ」

黒服5 「く、くそがああ！もう帰ってきやがった！」

男 「ありが…とう…！」

男、ふらつきながら女に近づく。

黒服1 「主…早く…！温かいものを…！」

男、女からペットボトルを取る。

女 「あー！」 黒服1・2 「よし！」

男、飲み物を飲む。

男 「うっ…！」(ペットボトルを落とす)

黒服1・2 「馬鹿、な…！」(崩れ落ちる)

女 「そっちは…」

老黒服 「よく冷えた…ほうじ茶…！」(『カランカラン』という氷のSE)

女 「ごめんなさいそっちは…私用のやつ、なんだ…暑かったから」

男 「いや…こっちこそ…ごめん…」

ピンピンし出す黒服5、敵1、敵2。

黒服5 「はーっはっはっはー！腹痛の天敵は冷えたものだったよな？一番堪えるぜ！今度こそ終わりだ！」

よろめく黒服1・2。はけ口に手を入れると武器がきなこ棒とビーダマンに換わる。

黒服1 「武器が…！きなこ棒と…！」

黒服2 「ビーダマンに…！」

女 「今ので、体調悪くなっちゃったよね？ごめん…話は、また今度にした方が…」

老黒服 「主…残念だが今日はもう、」

男、首を横に振る。

黒服達 「…！」

男 「大丈夫…！本当に、大丈夫だから…！」

女 「どうして…そんな」

男 「今日伝えるって、決めた想いを…俺の中に溢れる、この想いを…もう先延ばしになんて、したくないんだ！」

女 「村田君…」

老黒服 「ふっ…馬鹿か。主の心が折れていないのに、ワシらが先に諦めてはな」（トラ
ンシーバーを捨てる）

黒服1 「隊長…まさか…！」

老黒服 「ここに一度、隊規を犯し！再び戦場へ赴こうぞ！（はけ口から刀を受け取る）」

黒服5 「はっはー！今更ジジイが増えたところで何ができる！？」

黒服1 「馬鹿め…知らないのか？」

黒服5 「ああ？」

黒服1 「隊長は…あのサルモネラ大戦で生き残った最強の善玉、スーパービフィズス菌だ！」

老黒服、後ろを向くと背中に『びふいずす菌』と書いてある。

黒服5 「あのサルモネラ大戦を！？」

老黒服、ジャンプして舞台中央へ移動する。黒服達と敵達、構える。

老黒服 「…容赦はせんぞ。若造ども」

黒服5 「かかれー！！！」

黒服1・2・老黒服と黒服5・敵1・2の殺陣。

男 「ぐっ…！理恵子…俺は…！」

1〜2アクション。

男「ぐっ…！俺、は…！！」

1〜2アクション。

男「ぐっ…！俺は、ずっと…！！」

女「うん…！！」

男「俺は…俺はずっと前から！」

老黒服、刀で敵2を斬り捨てる。

男「キミのことが好きだ！」

黒服2、ビーダマンで敵1を殴る。

男「俺の、恋人になってくれ！」

黒服1、きなこ棒からつまようじを抜き取り黒服5をメッタ刺しにする。

女「はい…喜んで…！！」

同時に倒れる黒服5、敵1、敵2。黒服達ハイタッチをする。

男「はは…めっちゃ嬉しい」

女「私も…めっちゃ嬉しい！」

女、勢いよく男のお腹に抱きつく。

男「ぐああ…！！」

黒服達「え？」

緊急事態のSE。照明も赤く点滅する。その後『ゴゴゴゴ…！』という激流のようなSE。黒服達と敵達、流されるようにはける。

間

女、『ばっ！』と男から離れ、クンクンと数回ニオイを嗅ぐ。女、ゆっくりと男の

お尻の方を指す。徐々に暗転していく。

女「…ごめんね」

男「…俺の方こそ…ごめん」

女「…一生、ネタにするね」

男「…ありがとう」

完全暗転。

「最終回」

【登場人物】

監督

リポーター

演出

ファン

役者

主人公

院長

能力者

スパイ

痴女

闇魔界の霸王

ブラックホール（BH）

スタッフ

舞台上手側には院長と能力者がいる。下手側には椅子が4つ、一番下手から監督、リポーター、演出、ファンという順番で座っている。
上手側に照明。

院長 「駄目だ…どんな策をとつても全て失敗だ…！」

能力者 「院長…もう時間がありません」

院長 「分かっている…！」

下手側に照明。

リポ 「さあ始まりました！今最もホットなドラマの情報をお届けする生放送！ニューード
ラマパラダイス！本日の対談者は、あの超人気ネットドラマ『ザ・ドクターファイ
ト』の…久保監督です！」

監督 「よろしくお願いします」

リポ 「更に！ゲストとしてこの2人を呼んでいます！ドクターファイトの舞台を演出し
た、古澤さん！そして無類のドクターファイト好き、ファンクラブ代表、澤木さん
です！」

演出 「よろしく申し上げます」 ファン 「よろしく申し上げます！」

上手側に照明。

院長 「こうなれば…最終手段をとるしかない」

能力者 「まさか…また奴を…！？今回は危険過ぎます！」

院長 「しかしもうこの策しかないのだ…！何もしなければ、この世界は…この世界は…！」

下手側に照明。

リポ 「本日は最終回も間近に迫っているザ・ドクターファイトについてたっぷり喋って
頂きましたよう！」

ファン 「いえ〜い！」

リポ 「テンション上がってますね〜澤木さん」

ファン 「もう今日が楽しみで楽しみで…この日のために1027シーズン全てを見直しま
した」

リポ 「イカれてんな」

監督 「ちよっとヒクね」

演出 「監督まで？」

上手側にも照明。

能力者「分かりました院長…だから彼に、連絡を取っていたんですね？」
ファン「いやーやっぱり彼の活躍が楽しくて、ついつい観ちゃいますね」

院長「そうだ…この策は何としても彼の協力が必要だ」

監督「そうだね…やはりこの物語は彼あってこそ」

院長「数多の奇跡を起こしてきた…そう、あのイカれた男」

監督「あの最高の男」

監督・院長「竹内ジョウ」

リポ「いやーしかしジョーは数々の困難と戦ってきましたが、あんな内容いつもどうやって考えて撮っているんですか？」

演出「私も気になります、監督」

監督「…彼の物語、いや彼らの物語は私が考えている訳ではない」

リポ「え？」

監督「このザ・ドクターファイトという物語は…ドキュメントだ」

リポ・演出「は？」

監督「つまり彼らの活躍は実際に起こっているのだよ…皆さんも、平行世界・パラレルワールドという言葉は知っているね？」

リポ「ちよっと…何を言ってる？」

監督「そう…彼らはこことは別のもう1つの世界、我々制作陣は親しみを込めて隣の世界と呼んでいるが、そこで実際に生きているのだ」

ファン「まさか…！」

リポ「久保、監督…これ、生放送ですよ？そういう変な冗談は…」

監督「それでは今から…実際にお見せしよう」

監督、立ち上がり舞台中央へ歩いていく。

リポ「え？ちよっと…」

監督、上手側に手をかざす。←の台詞に合わせて黒子が直立型の『窓』（40cm×40cmくらいの大きさ）を持ってきて設置する。

監督「ビシュ、ビシュシュシュシュシュシュシュバーン！」

リポ「こ、これは…！」

監督「この世界と隣の世界を繋ぐ、次元の切れ目だ。我々は窓と呼んでいる。向こう側を

見てみなさい」

リポーター、演出、ファンの3人、窓から上手側を見る。

リポ 「ひ、人だ…人がいる…！しかもあの人は、」

ファン 「院長に、悲しい回想を視る能力者だ…！すごい！本物だ！すごい！」

監督 「この窓は我々が偶然開発に成功した極秘技術。普段は我々のスタジオでこの窓を開いている」

ファン 「そして隣の世界の様子を、カメラで撮っているということか！」

監督 「その通り。この物語は本当にジョー達のドキュメント…ノンフィクションだったのだよ。つまり我々がやることは」

ファン 「1話の長さになるように編集作業を行うだけということか！」

監督 「その通り。そして現在この技術はこちらの世界にしかない。あくまでこちらが一方通行で見ているのだ。それは隣の世界では超能力や魔人等の非科学的で超自然的な分野が」

ファン 「存在・発達している分、こちらの世界の方が科学的な分野では発達しているということか！」

監督 「その通り」

演出 「理解力良いねキミ、さつきから」

ファン 「すごいファンなので…そういう妄想もしたことが」

リポ 「しかしなぜ、このような秘密を明かしたのですか？しかも生中継で！」

監督 「…それは今回でなぜ最終シーズンなのかという理由にも繋がる話だ。…隣でちょうど、その話をしている」

能力者 「しかし…今回ばかりはジョーと奴でも…！世界が滅亡する危機を、なんとかするなんて…」

リポ・演出 「え？」

リポ 「世界が…滅亡…？」

監督 「そうだ…そして残念なことにその問題は、我々の世界にも及ぶ」

演出 「どういう…ことですか？」

監督 「我々の世界と隣の世界は絶妙なバランスで繋がっている。つまり隣の世界が滅びれば…我々の世界もどうなるか分からない」

リポ・演出 「は？」

主人公 「コンコン」

院長 「やっと来たか」

リポ 「どうなるか分からないって…！それって、」

下手側に主人公が現れる。

ファン「ジョーだー！すげー！本物の竹内ジョーだー！」

監督「最悪：共に滅んでしまう可能性も、あるということだ」

リポ「ちよっと：何ですか、それ：！」

演出「滅びるって：！」

主人公「久しぶりだな」

ファン「喋ったー！すげー！ジョーの生声だー！」

監督「これはドラマ放送以来、最大の危機となる」

リポ「だから：この世界の存亡を生中継で放送しようと：！あなたは考えたの、」

主人公、椅子に座る。

ファン「座ったー！ジョーがすわ、」

演出「うるさいなキミ！さつきから！座ったーじゃないよ！」

ファン「すみません：本物を見てつい興奮しちゃって」

監督「つまり世界が滅亡するかどうかは：彼らの活躍にかかっているのだ」

リポ「もどかしいですね：私達はここで、応援することくらいしかできないのか：」

主人公「それで？一体全体何が起こっているんだ？なぜ世界が滅亡する？」

院長「（パソコンを見せながら）数ヶ月前、突如この地点に大きなエネルギー反応が現れた。理由は分からない。しかしそのエネルギーはどんどん膨らんでいっている：このままでは巨大なブラックホールとなり、この世界全てを飲み込んでしまうと計算されたのだ」

主人公「そんな大変な事態：どうしてこんなギリギリになるまで俺は対策局に呼ばれなかったんだ！」

院長「それは今お前がなぜかプロで野球してるからだろうが！」

リポ「確かに今野球してますねこの人：」

院長「しかしそんなお前をどうしても呼ばなくてはならない事態になったのだ。今回の策でな」

主人公「どうしても俺が？：まあ良い。その策とは、一体何なんだ？」

院長「奴を、もう一度この地上に召喚する：！そう、あの閻魔界の霸王を！」

主人公「霸王だと：？」

ファン「閻魔界の霸王：とは、ザ・ドクターファイト267シーズンと982シーズンに登場した閻の魔界から召喚された魔人で、267シーズンでは召喚された隙をついてジョーに一撃で葬られた故、その恐ろしさの割にドンマイキャラとしてネットでもよくイジられてる登場人物です（ペラペラと喋る）」

演出 「めちゃくちゃ説明してくれる！なんだこいつ」

監督 「しかし982シーズンでは共に戦った仲間だ」

ファン 「まあジョーが肩の治療を優先して魔界へ帰らせちゃいましたけどね」

主人公 「霸王か…あいつで大丈夫なのか？あの時、ランプの精にボコボコにされてたけど」

能力者 「それはあなたが盾にしていたからでは？」

院長 「他のあらゆる策が失敗に終わってしまった。ならばもう非科学的な方法…魔力とい

う超自然的な力で、世界を守ってもらえるよう奴と交渉するしかないのだ」

リポ 「でも協力してくれるんですかね？霸王さん」

演出 「確かに…色々酷い目に合わされてるのに」

院長 「そしてジョーお前にしかできない任務それは、霸王にあの時ごめんなあと謝ることだ」

演出 「そういう理由で呼ばれたんだ！？この人」

院長 「きちんと許してもらうんだ」

主人公 「分かった分かった。それじゃ俺は霸王の機嫌を取れば良いってことだな？」

院長 「任せたぞ。さあ話は終わりだ。時間がない。まずは霸王をこの場に召喚する。本部から奴に関する極秘資料を取り寄せた。(封筒を出す)ここに召喚の方法が書かれている」

主人公と能力者、封筒から紙を取り出す。

能力者 「なるほど…院長、本当にこれですか？」(紙を正面に向けてと幼稚園児の落書きみたいなもの描かれている)

演出 「子供の落書きじゃん！間違えてるよそれ！」

院長 「それで間違いない。極秘資料故に、全て暗号で書かれているのだ」

演出 「ホントに？なんかワキ毛とか書いてあるけど…」

院長 「かなり複雑な暗号故に解読に時間はかかったが…奴を召喚するためには3つの供物が必要だということが分かった」

主人公 「供物？」

リポ 「闇魔界の霸王…それ相應の恐ろしい品物が必要という訳ですね…」

院長 「供物は、人が写っている写真、パンティー、ワキ毛だ」

演出 「結局ワキ毛じゃねえか！いやその暗号本当に合ってる！？間違ってるんじゃないの！？」

スパイ 「待ちな」

主人公 「誰だ！？」

スパイが上手側に現れる。

スパイ「どうやら俺の、出番のようだな」

院長「おお：来てくれたか」

主人公「お前は：俺の後輩がお世話になっていた、先輩スパイ」

ファン「先輩スパイとは：シーズン173〜176に登場したあらゆる暗号に精通しているスペシャリストです」

能力者「あなたが見てくれるのなら安心です」

スパイ「ふっ：（紙を見ながら）なるほど：必要な供物はな、さっき言ったので合ってる」

演出「合ってるのかい！」

リポ「え？本当にさっき言った3つなの？」

スパイ「いや待て：少し追加事項がある。供物である写真・パンティー・ワキ毛は、全て女性のも物でないと駄目だ」

演出「おい霸王！お前は女好きの変態なのか？」

院長「なんてことだ：ここに女性はいない：！もう時間もないというのに！」

痴女「待ちな」

痴女が上手側に現れる。

痴女「どうやら私の、出番のようね」

スパイ「お前は：ただの痴女！」

ファン「ただの痴女とは：特にスパイでも何でもないただの、そういう人です。105、173、189、221、245、531、673、1021シーズンに、登場しています」

演出「けっこう出てるな！」

痴女「パンティーにワキ毛と、全て提供するわ」

演出「流石痴女！」

痴女「（鞆を能力者に差し出す）すでにここに、入っているわ」

リポ「用意も周到！」

能力者「（鞆の中を漁りながら）あれ？あなたの写っている写真は？」

痴女「あらごめんなさい。生憎写真だけは持ち合わせていなかったわ」

主人公「何？なんかそういうプレイ中の自分の写真とか撮って持ってないのか？」

痴女「そういうのはちよっと」

演出「それは駄目なんだ。基準が分からん」

院長「今から写真を撮って現像するにも、時間がかかりすぎてしまう……！」

リポ「そんな：ここにきて、手詰まりなんて……」

ファン「監督！こちら側で何か手助けはできないんですか！？」

監督「…できる」

ファン「え？」

監督「少しだけなら…その窓を通してこちらから干渉できる、はずだ。しかし…」

演出「そもそも…こっちだってそんな急に彼女の写真を用意することなんて…」

役者「待ちな」

役者が下手側に現れる。

役者「どうやら俺の、出番のようだな」

演出「お前は…俺の付き添いで来てた劇団クロサワの役者神田！」

ファン「役者神田…コミカルな動きを得意としながら最近ではシリアスにも幅を利かせるが

カーテンコールでの自己主張が強いのがたまにキズの、役者です」

演出「なんでも知ってるなお前！なんでもうちのことも詳しいんだよ！というかお前（役者）は何しに出てきたんだよ」

役者「演出。すぐ現像できる写真が、必要なんでしょう？」

演出「いやそうだけどそんなものどうやって…はっ！」

役者「そう…チェキ、ですよ」

リポ「そうかチェキなら！写真を撮ってすぐに現像できる！」

役者、『窓』から痴女の写真を撮って現像する。

役者「出てきたぜ！」（写真を掲げる）

監督「もう時間がない。すぐにその写真を隣の世界へ送るぞ」

役者、写真を持った右手を『窓』に入れようとするが止まる。

役者「な、なんだ…！？物凄い抵抗感だ…！」

監督「本来あちらには存在しえない物体を送るのだ。その写真だけでも大きなエネルギー量をもち、その干渉行動で自身もかなりのエネルギーを消費してしまう…やれるか？」

役者「それくらい…やってみせますよ！」

役者、苦悶の表情で『窓』を通して上手側へ腕を伸ばそうとする。

役者「う、うおおおおお！！！」

監督「バリバリバリバリバリ！」

リポ・ファン 「頑張れー！神田さん！」

演出 「客観的には…けっこうマケな感じだけどね…」

役者 「うあっ！！」（腕を『窓』から上手側へ出す）

リポ・ファン 「やった！」

間

院長・能力者 「ひいひいひい！！！」

演出 「そりゃ恐いか！向こうからしたら急に謎の腕が現れたんだもんね！」

主人公 「おらあ！」（役者の腕を蹴る）

役者、写真を上手側に落とし、腕を下手側へ徐々に戻す。

役者 「ぎゃああああ！！！」 監督 「バリバリバリバリバリバリ！」

演出 「帰りにもエネルギーの消費があるのね」

役者の腕、下手側に戻る。その後役者、ふらふらとはけていく。

役者 「後は…任せましたよ」

演出 「嵐のような奴だったな…でもこれで」

能力者 「(写真に気付く) うん？これは…彼女の写真だ！」

4人 「えー？」

院長 「一体なぜ…？」

能力者 「院長、どうしますか？」

院長 「…しかし迷ってる暇はない！その写真を使おう！…後は召喚の儀式を行うだけだ。

（スパイに） 儀式に関する暗号も、見てくれないか？」

スパイ 「任せる（紙を見る）…なるほどこれは複雑な暗号…皆、集まってくれ。今から俺の言う動きに、ついてくるんだ」

上手側の照明をしばる。スパイ、必死に説明するジェスチャー。主人公達は皆驚きの表情をしている。

リポ 「あの、緊迫感…！一体、どんな儀式を…！？」

スパイ 「いくぞ！…コンコンコン、コパーパ・コゲツツ！サガツチュウの父ちゃん銀行員、

キルキュルキュルキュル三キュルキュル、合わせてキルキュルサガツチュウ！サガツ

チュウ！サガツチュウ！サガツチュウ！サガツチュウ！サガツチュウ！サガツチュウ！サガツ

ユウ！サガツチュウ！もうやめろ！……なんだサガツチュウって！馬鹿か……！サガツチュウ！」

間

主人公・能力者「やりたくない……」

演出「だよね！何今の！？」

痴女「サガツチュウ！サガツチュウ！」

演出「やるんかいお前は」

スパイ「ほら！彼女のように皆も！」

能力者「…無理だ！」

演出「まあでも気持ちは分かるけど儀式しないと」

主人公「俺も嫌だ！」

スパイ「やるんだ！」

主人公・能力者「嫌だ！」

スパイ「やるんだ！」

主人公、スパイ、能力者、3人もみくちやしなから『やるんだ！』『嫌だ！』と交互に言いながらグルグル回っている。良い頃合いで止まり、同時に痴女は鞆を掲げる。

スパイ「コンコンコン」

主人公「コパーパ・コゲツツ」

スパイ・主人公「サガツチュウ！サガツチュウ！」

能力者「ボフン！」

上手側に霸王が現れる。

院長「召喚成功だ」

演出「あ、今のが儀式だったの！？あの揉めてるの含めて儀式だったんだね！複雑過ぎるだろ」

霸王「ここは…地上か？」

主人公「…久しぶりだな霸王。ジョーだ」

霸王「ジョー…？誰だ？」

演出「霸王…！まさかあの時の傷が深すぎて、記憶が…！」

霸王「知らないな…散々協力して戦ってやったのに我の傷の回復よりも自分の肩の治療

を優先した竹内ジョウなんて人間我は知らないけどー？」

演出「めちやくちや根に持つてるやつだこれ！忘れてるとかじゃなくて」

ファン「霸王：可愛いな」

主人公「霸王ーあの時のことは悪かったよ。ごめんな」

霸王「ふーん。許さないもーん」

院長「代表として私からも謝る。申し訳なかった。だから我々に協力してくれないか？」

霸王「ふーん」

痴女「(妖艶に) 私からのお願いでも、駄目？」

霸王「めっちゃタイプ」

演出・リポ「「ええー!？」」

霸王「あの供物もあなたのか？」

痴女「そうよ」

霸王「だからかー今めっちゃ調子良いんだよーあの供物のおかげよ」

演出「闇魔界の人の好みは：一味違うぜ」

霸王「仕方ない。あなたのお願ひなら聞いてやろう」

痴女「ありがと」

能力者「本当に協力してくれるんですか？」

霸王「霸王に二言は無い」

院長「それでは霸王よ聞いてくれ。(中央前方を指しながら) あと僅かであの地点に巨大

なブラックホールが発生する。お前の力で何とかできないか？」

霸王「：今の我ならなんでもできる。どんな現象でも我の超パワーで吹き飛ばしてくれよ

う」

能力者「(機械を操作しながら) それではハッチ：開きます！」

主人公「霸王、俺もパワーアップした能力を使ってサポートするぜ」(手をかざす)

霸王「勝手にしろ」(舞台中央前方へ移動しながら)

能力者「きますす：！ブラックホール、発生します！」

ブラックホール (BH) 『「おおおお……!」

舞台下手はけ口からブラックホール(全身黒タイツでお腹に『ぶらっくほーる』という文字が縫ってある)が小走りで現れる。

演出「ええー…どういうこと?あれ、が：ブラックホール?」

主人公「成功だ」

演出「え?」

主人公「俺の能力はお腹の菌達を擬人化して見せる力。プロ野球で揉まれたことで能力は進化し、あらゆるものを擬人化して周りで見せることが可能になったのさ」

演出「なんてどうでも良いパワーアップなんだ…！」

霸王「こんなもの…私の極大パワーで打ち消してくれるわ…はああああ…（力を溜める）

はあ！！！！（BHに両手をかざす）バリバリバリバリ！！！！」

照明効果。しかしBHは動じない。

BH「てい」（そっと霸王に触れる）

霸王「ぎゃああああ！！！！」

霸王、叫びながらBHに吸い込まれないように必死に上手側へ逃げてくる。

霸王「…ギリギリで負けたわ」

演出「嘘つけ！」

主人公「圧倒的に負けてただろ！」

霸王「いや手ごたえはあったんだってホント！我にもっと魔力、単純なエネルギーを与えてくれればそのまま打ち消せるはずだ！」

院長「…例えそれが本当だとして…そんなものがここに、ある訳がないだろう…」

霸王「すまない…」

リポ「もう…駄目、か…」

監督「いや…まだ手はある」

演出「監督？」

監督「本来ありえない存在である私という生命体が隣の世界に渡ったら…：私自身が多大なエネルギー量を持つはず。そのエネルギーを、霸王に使ってもらおう」

ファン「監督…いくらなんでもそれは危険過ぎますよ！なんで監督がそんなこと…！」

監督「そもそも…このブラックホールが生まれたのは、私が原因かもしれないのだ」

演出・リポ・ファン「「え？」」

監督「干渉するはずがない世界と世界を一方的に繋げてしまった。その捻じ曲げてしまったこの世の法則を打ち消すために…ブラックホールが発生したかもしれないということだ」

ファン「そんなこと…！」

監督「まあどちらにせよ、だ…今まで彼らの生活を盗み見してきたのは事実。その罪を…

清算しに行くだけだよ」

ファン「監督…」

監督「それでは…行ってくる」

監督、窓に両手を徐々に入れていく。

監督 「はあああああ……！」

演出 「そんな小さな切れ目から……！本当に行けるのか……！？」

監督 「バリバリバリバリバリバリバリ……！」

監督、結局窓を使わず横からスツと上手側へ行く。

演出 「そうやって行くんかい！」

院長 「なんだ！？誰だお前は！？」

監督 「やつと……直接会えた、あなた達……！」

主人公 「おらあ！」（監督に蹴りを入れる）

監督 「これがジョーの……蹴りか」

能力者 「なんか感慨深くなってる！いやそれよりも……ジョーの蹴りを受けて無傷……！？」

霸王 「こやつ……なんてエネルギー量を持っている……！」

院長 「本当に何なんだお前は？」

監督 「詳しく説明している時間はない。霸王！私というエネルギーを使い、ブラックホールを消滅させてくれ！」

霸王 「……駄目だ。お前のエネルギー量でも、それでも足りない……負け戦になる」

監督 「そんな……」

主人公 「だったら……俺の力も合わせたらどうだい？」

監督 「ジョー……？いや待て……そうか……！」

主人公 「どういう訳かこいつを蹴った瞬間、物凄いパワーが俺に流れてきたんだ」

監督 「それはおそらくだが……私の世界でジョーは絶大な人気を持っていた。その熱量・パ

ワー・名声力がそのままエネルギーとなり、ジョーと私が干渉することで世界は繋がりがり、その力が全て彼に注がれたのだろう」

主人公 「ま、理屈はよく分からねえが……2人ならどうだ？霸王」

霸王 「それでも……正直五分だ。50%の確率で、我々も消滅してしまうぞ？」

主人公 「ふふ……50%の確率で壊れちゃう、か。しかも肩だけじゃないときた。だが今度は

……逃げる訳にはいかないな。行かせ、霸王」

霸王 「ジョー……はつきり言おう。我が恐い」

演出 「なんだこいつ……！こまできて……！」

監督と主人公、無言で霸王をBHの近くまで押していく。

霸王 「（本気で抵抗しながら、ブツブツ喋る）ちょ……！ホント、ホント……！自分の、ペー

スとかあるから……！パワハラ……！」

監督・主人公・霸王、BHの正面で止まる。

霸王「もう！！んん！！くうくう…こうなったらヤケだ…！お前らいくぞおおお…(力を溜める) はあ！！！！(BHに両手をかざす)」

監督・主人公「(両手を霸王の肩に乗せながら)バリバリバリバリ！！！！」

照明効果。その後徐々に暗転していく。

リポ・ファン「監督…！！」

院長・能力者・スパイ・痴女「ジョー…！！」

リポ・ファン「監督…！！！！」 院長・能力者・スパイ・痴女「ジョー…！！！！」

演出「は、霸王も頑張れー」

完全暗転後、監督・主人公・霸王・BH、はける。その後明転。

能力者「ブラックホール反応…完全に、消滅しました…しかし…！！3人の、反応も…」

リポ・ファン「監督…」

院長・痴女「ジョー…」

演出「(少しキョロキョロした後)は、監督…」

能力者「…いや…！！3人…消えてません！3人の反応！消えていません！」

全員「…え？」

能力者「でも…なんだ…？ここにはいないのに…すぐ近くに居るような…まるで、どこか別の世界へと消えてしまった、そんな反応です！」

演出「それって…まさか…！！」

リポ「こっちの世界に！？でも、なんで…！？？」

ファン「巨大なエネルギーの衝突によってあの場に次元の切れ目が生まれた、とか…？」

演出「まあ理由なんてなんだって良い…だったら監督、必ず俺達があなた達を見つけ出しますよ！そしてまたジョーと作ってください！次の、」

演出・リポ・ファン「ザ・ドクターファイトを！」

BGMが盛り上がる。徐々に暗転していく。

監督「はいカー…ット…！！」

照明が戻り、BGMもカット。監督が出てくる。

監督「いやーよかったんじゃない？最終回。どうでした？ディレクター」

上手と下手の役者達が全員監督に近づいてくる。OPBGMが流れる。スタッフが出てくる。

スタッフ「めっちゃ良い画撮れましたよ監督。ザ・ドクターファイトのラストにふさわしい出来でしたね」

霸王役の人が出てくる。

霸王「へへへ…やっぱり監督役を本人自ら演じたのがよかったですかい？」

リポ「こいつはまた…カメラ回ってないとすぐゴマすりよるからに」

ファン「いやー私もまさかファン役で最終回に出演できるなんて…！最高の時間でした！」
演出「ジョー役の仲谷さん、これでクランクアップですよね？」

主人公役の人が出てくる。

主人公「これで終わりだと思うと…寂しいですねえ」

スタ「ただ監督、効果音のことなんですけど」

監督「あぁどうでした？最終回は役者のテンポとテンションのために全部口で効果音入れて進めてみましたけど。勿論、あとの編集で本当の音は入れますよ」

スタ「いえあの…やっぱ口の動きが不自然になりますから、そこだけ撮り直した方が良いですよ」

徐々に暗転していく。

監督「え〜〜！？」

スタ「仲谷さんもそこだけでもう一度お願いします」

主人公「え〜〜！？」

完全暗転。

(終)